

共同研究【若手】● 宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究 (2013-2015)

研究の目的と背景

2013年10月に始動した本共同研究は、現代社会における宗教（宗教者ないし宗教的な集団や組織）による開発実践が、特定地域の政治的・社会的なコンテクストのなかでいかに展開しているかについて、民族誌的な手法を用いて事例を収集し、考察することを目的としている。

今日、宗教復興と呼ぶ現象が世界各地で見られるが、本共同研究がとくに注目しているのは、1980年代以降、宗教が公共領域において急速に影響力を増大していることである。たとえば、「信仰にもとづく組織（FBO: Faith-Based Organizations）」が独自のネットワークを駆使しながら、国家や国内外のNGO／NPOとともに積極的にケア活動を展開するという光景は、グローバルな規模で広がりを見せている（Leutloff-Grandits et al. 2009）。その背景には、新自由主義経済の浸透、国家による福祉サービスの縮小化、さらには民間組織の台頭などを指摘することができる。日本においても、仏教やキリスト教の宗教者が、医療や介護の分野において、自殺防止、ターミナルケア、被災者支援などに取り組んでいることが注目を集めつつある（稲場・櫻井 2009；島蘭・磯前 2014）。

こうした現象に着目した先行研究は、おもに2つに大別できる。1つは、開発経済学や平和学における開発論的アプローチである。これは、開発援助の方針転換と関連し、豊かさのオルタナティブな基準を模索する実践者の観点から宗教の可能性を論じたものが大半である（ハインズ 2010）。もう1つは、宗教学や宗教社会学におけるポスト世俗化論的アプローチである。公共宗教という概念を用いて、近代的な諸制度と親和的な宗教の形態がありうることを論じたカサノヴァをはじめ（カサノヴァ 1997）、世俗化論の枠にとどまらない宗教理解の方法が模索されている。しかし、人類学においては、アサドが公共宗教論や世俗主義に潜む近代西洋中心主義的な偏向を批判しているものの（アサド 2006）、仏教、イスラーム、キリスト教などさまざまな宗教が、世界各地の当該社会のコンテクストのなかでいかに公共領域での影響力を増大させているのか、比較民族誌的アプローチを用いて論じられることはなかった。

こうした問題関心のもと、本共同研究では、これまでに計4回の研究会を開催した。各回の研究会では、アジア・オセアニア地域で調査研究をおこなう人類学、民俗学および宗教社会学の若手研究者が集い、宗教の開発実践に関わる理念や規範、ならびにそこに見出されるネットワークの特質を比較検討し、議論を積み重ねてきた。では、宗教の開発実践はど

のように展開しているのか。以下においては、筆者の調査研究の成果から、その一端を紹介したい。

タイ仏教僧による「開発」の現場

筆者は、2004年から現在に至るまで、東南アジア大陸部タイ社会において、さまざまな現実的課題（貧困、エイズ、少子高齢化、居住など）に取り組む上座部仏教の僧侶を対象に調査研究をおこなってきた（岡部 2014）。主な対象者であった、タイ北部最大都市チェンマイ近郊部のある寺院の僧侶たちは、「僧侶は社会のために働かなければならない」という先代住職の思想と実践を受け継ぎ、1970年代半ばから約40年間にわたって積極的に現実的課題に取り組んできた。彼らはその取り組みを「開発」（*phatthana*）と呼ぶ。

1980年代末から1990年代初めにかけて、エイズの爆発的流行を経て、この寺院の周辺地域では「行政区ヘルスケア委員会」が設立され、僧侶たちが、医師、看護師、保健ボランティア、村長、自治体職員などの多様なアクターとともに委員会に参加するようになった。この委員会の主たる活動である家庭訪問プロジェクトでは、委員が週に一度、行政区内の高齢者、障がい者ならびにHIV感染者などの家庭を訪問し、血圧測定、薬の服用や通院状況を確認するとともに、家族のケアをめぐる悩みを聞き、



僧侶は「行政区ヘルスケア委員会」の一員としてエイズ患者の家庭を訪問する（2005年、タイ・チェンマイ県）。

公的支援の必要性などを検討する。実際の訪問の場において主導的な立場にあるのは看護師であり、その看護師を保健ボランティアがサポートする。いずれもほとんどが女性である。

それに対して僧侶は、看護師と保健ボランティアとが訪問先の村人と交わす会話を見守り、時おり会話に加わるといふ具合である。たとえば、寝たきりの母親と子どもの世話を同時におこなう男性（40歳代）を訪問した際には、僧侶は「お母さんの面倒をみることは、10万バーツを布施するよりも、何倍も多くのご徳が得られることだから」と言って励ましていた。また、訪問先の村人に懇願されて、村人の手首に綿糸を巻きつけて健康を祈願するマツ・コー・ムー（*mat khor mu*）という呪術的实践をおこなうこともあった。さらに、こうした精神的な励ましに加えて、僧侶は家庭訪問の際に、村人から寄進された食料や日用品（歯ブラシ、石鹸、タオルなど）の残余や、まれに現金を見舞い品として持参し、経済的に支援することもある。

ある若年の僧侶たちが家庭訪問プロジェクトに参加したときのことである。いつものように、看護師は保健ボランティアとともに、訪問先の高齢女性（90歳代）と雑談に花を咲か

せていたが、僧侶たちは傍らで彼女たちのやりとりにただ耳を傾けるだけで、手持ち無沙汰な様子であった。しかし、「ねえ、読経してあげたらどうかしら？」と促す看護師の言葉で、状況は一変する。僧侶たちは慌てて読経に応じ、高齢女性をはじめ、その場に居合わせた人びとが全員両手を合わせて、僧侶の読経に聴き入ったのである。僧侶が読経を終えると、高齢女性は「足がよくないから、ずっとお寺にも行けずじまいったけれど、今日は黄衣が見られてとても嬉しかった」と言って、顔をほころばせた。

この事例は、タイ社会における僧侶の開発実践のごく断片に過ぎないが、ここからは、いくつかの示唆的な論点が浮かび上がってくる。第1に、僧侶が開発の現場において、功德という宗教的概念を用いて親子間のケアの意味を説いていることや、読経や手首への巻糸などの呪術的な行為をおこなっていることである。第2に、僧侶は、開発実践をとおして積極的に世俗に関わろうとするものの、実際に村人と顔の見える関係においては、どのようにふるまえばよいのかが分からず、戸惑いを隠しえないことである。この事例では、看護師の介在によって、僧侶が自らに期待される役割に気づき、結果として村人を救いへ導くことができた。第3に、僧侶の開発実践は、けっして個人的資質によってのみ説明されるものではない、ということである。若年の僧侶たちが、家庭訪問プロジェクトに参加し、積極的に世俗に関わろうとするのは、そのような志向性が寺院内の師弟関係をつうじて継承されてきたことと無関係ではないし、またそのような志向性は1960年代以降のタイ政府による開発政策や、1980年代以降の国内外NGOによるオルタナティブ開発の潮流によっても強く後押しされてきた。さらには、タイ社会における1990年代末以降の地方自治化の波が、住民主導型の開発政策への方針転換や、地域レベルでの医療福祉システムの再編を促したことも背景になっている。その流れが、ヘルスケア委員会のような運動を生み出し、僧侶をアクターの1つとして巻き込むようになったのである。僧侶による開発実践は、彼らを取り巻く複雑な政治的・社会的コンテキストのただなかにおいて理解される必要があるだろう。

すでに先行研究が明らかにしてきたように、上座部仏教の僧侶たちは、究極的には涅槃（無執着）の境地を目指すが、実際の出家生活においては深く世俗社会に埋め込まれている。村人の生老病死に関わる儀礼の執行のほか、薬草治療や星占術などの民俗知識の再生産、係争の仲裁、名付け、仕事の紹介などをおこなうことで、僧侶は村人たちの抱える困苦に向き合ってきた。今日のタイ社会における僧侶の開発実践



寺院所有地の一部を畑として耕す僧侶たち（2004年、タイ・チェンマイ県）。

は、こうした伝統的な社会的役割の延長線上において捉えられるものである。

しかし開発の現場においては、常に宗教の伝統的な役割が問い直されている。私たちは、開発の現場において、人と人が関わり合うなかで、宗教と世俗の境界が立ち現れ、揺らぎ、そして作り変えられている局面にこそ着目すべきなのではないだろうか。宗教の開発実践に、宗教と世俗の境界が立ち現れる局面に関する事例を丹念に積み上げ、比較検討すること。そうすることで、現代社会における宗教の普遍性と個別性を描き出せるならば、フィールドワークの強みを生かした人類学の立場から宗教研究の進展に寄与しうるはずである。ここに本研究の課題と可能性がある。

今後の研究会

とはいえ、対象地域もテーマも広範囲にわたる本共同研究は、現時点ではちょうど折り返し地点に差し掛かったばかりであり、まだ十分その成果を取りまとめる段階には至っていない。しかし、これまでの研究会での議論を踏まえて、宗教の開発実践を「宗教による社会（および社会問題）へのコミットメント」と広義に捉え、それを取り巻く政治的・社会的コンテキストを含めて民族誌的な事例の収集、考察をおこなうことを第一に取り組んでいる。このように、開発や公共性とは何かについて、あらかじめ厳密な定義づけをおこなわないのは、特定のローカリティのもとで開発実践を捉えるとともに、それらを比較検討することによって新たな視角を浮かび上がらせようと意図するからである。宗教の開発実践はそれぞれの地域において歴史的に、政治、経済、国家など、世俗のあらゆる側面と密接に結びついて展開してきた。それが、グローバル化が進行する現代社会において、開発、環境、人権、ガバナンスなどの言説や資本主義などと複雑に絡み合い、いかに新たな意味や価値を付与されるようになってきているのかを捉えることを目指しているのである。

本共同研究は、今年度も複数回の研究会を予定しているが、そこではより抽象度の高い議論をとおして、現代の社会変動との結びつきにおいて生起する宗教の新たな動向にアプローチする方法を探求したい。

【参考文献】

- アサド、タラル 2006『世俗の形成—キリスト教、イスラム、近代』中村圭志訳、みすず書房。
- Carolyn Leutloff-Grandits, Anja Peleikis and Tatjana Thelen (eds.) 2009. *Social Security in Religious Networks: Anthropological Perspectives on New Risks and Ambivalences*. New York・Oxford: Berghahn Books.
- カサノヴァ、ホセ 1997『近代世界の公共宗教』津城寛文訳 玉川大学出版部。
- ハインズ、ジェフリー 2010『宗教と開発—対立か協力か?』阿曾村邦昭・阿曾村智子訳、麗澤大学出版会。
- 稲場圭信・櫻井義秀編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社。
- 島園進・磯前順一編 2014『宗教と公共空間—見直される宗教の役割』東京大学出版会

おかべまゆみ

中京大学現代社会学部准教授。専門は文化人類学、タイ上座部仏教研究。最近の著書に『「開発」を生きる仏教僧—タイにおける開発言説と宗教実践の民族誌的研究』（風響社 2014年）、論文に「タイにおける開発の進展と僧侶による水平的なつながりの構築—『北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク』を事例として」（岸上伸啓編『開発と先住民』明石書店 2009年）など。